

歩き始めの子供の靴着用実態と足部形状(第1報)靴着用実態に関する消費科学的考察
広島大教育 ○鈴木明子 古田幸子 甲南女大短大 木岡悦子 森由紀
京都文教短大 菊藤法 熊本大教育 高森壽 広島文化女短大 谷山和美

目的 歩き始めの子供の靴については、足部の骨格や歩行動作が未発達であるために、歩きやすく、安全面への配慮がなされたデザインであることが、その選択の重要な問題である。本報では、既報の被服構成学部会「乳幼児の衣料サイズに関する研究」をさらに追究すべく、歩き始めの子供の月令別靴着用実態および市販靴のデザイン別はかせやすさ等の調査結果について消費科学的考察を試みた。

方法 調査対象は、関西、広島、熊本の歩き始めから24カ月までの乳幼児 207名の主たる保育者とし、日常よく着用する靴1足について、そのデザイン、サイズなどの項目と適合性、またははかせやすさの基準などについて質問紙法により調査を行った。調査時期は1991年10～12月である。各項目の単純集計およびクロス集計を行い、フェースシートの項目とのかかわりも考慮しながら考察を行った。

結果 靴の性状を示すすべての項目について、性別に有意な差はなかった。また、サイズ、はかせやすさを購入の根拠とした保育者が多かった。購入時のサイズは、成長を考慮し、または部分的に適合しないため、1サイズ大きいものを選択する者が約35%あり、靴下やとめ具で調整している現状であった。一方で、約60%の者が大きめの靴をはかせた場合の危険性を訴えていた。部位別に不適合を訴えた件数が最も多かったのは、足高が3cm以上における「甲の高さが靴の方が小さい」であり、足指部の幅についても市販靴の問題点が指摘された。はかせやすさについては、楔状骨点が覆われた形状でマジックテープによって着脱するタイプのものが評価が高かった。